

タルド社会学と芸術

Tarde's Sociology and Art

池田 祥英

この発表では、ガブリエル・タルド（Gabriel Tarde, 1843-1904）という社会学者の理論の概要を紹介し、この理論に基づいて彼が芸術をどのように論じたのかを見ていく。タルド社会学理論のキーワードは「模倣」であり、模倣は個人間の相互作用である。ある人の脳内に現れたひらめきは、それだけでは何にもならないが、他の誰かに知られることで、どんどん広がって社会を変えることにつながる。このように、人々のなかから現れるひらめき（発明）、その広がり（模倣）、その広がり相互干渉（対立）、という三つの要素から社会の変化が描き出される。

ところで、何が模倣されるのかを決める要因は、その「もの」が持つ優位性、合理性である場合もあれば、その「もの」の担い手の威信である場合もある。不便なものでも貴族が持っているものは広まっていくことがある。このような威信をどのような対象に見いだすか、というも時代によって変わる。自分たちの過去の伝統に威信を見いだす「慣習」の時代と現在の外国のものに威信を見いだす「流行」の時代が交互に訪れることで、社会が変わっていく。これがタルド社会学の基本原則である。

タルドはこの理論をさまざまな論点に応用する。タルドは裁判官であり、犯罪が模倣によって広がることを示して犯罪の社会学的考察を目指した。また、タルドはマス・メディア（彼の時代は新聞）の働きに着目し、新聞が同時に多数の人々に同じ思想を広める役割を果たしていることを指摘し、その可能性と危険性を明らかにした。このような社会学的な応用研究を行う一方で、タルドは芸術についてもたびたび言及している。模倣の議論のなかでは、慣習と流行の交替による芸術の広がりを論じており、『未来史の断片』という小説のなかでは太陽の衰弱によって氷で閉ざされた未来の地球において、地底に逃れた人類が紆余曲折を経て美的生活開花させる様子が描かれる。これは完全にSFの世界であるが、模倣と共に個人の創意も重視したタルドの立場をよく示していると言える。